

徳永直の会 会報

第54号

「徳永直の会」発足にあたって

「徳永直の会」会長 高木 陽助

若々しい生命の胎動を感じさせる新緑の五月二十三日、「熊本・徳永直の会」の総会が、崇城大学市民ホール会議室において開催されました。初めに中村青史先生の『冬枯れ』における負でない側面」という演題の講演を拝聴しました。その後、八項目の議題については協議がなされ、満場一致でご承認いただきました。（詳しい内容については別記に掲載）

総会のご案内でもお知らせいたしましたように、本年度から役員構成が大幅に変わりました。これまでの役員の方々のようにしつかりした運営はできないかもしれませんが、新役員一同力を合わせて、会員の皆様の温かいご支援にすがり、精一杯努力する所存です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

それにしても、今更ながら自分の軽率妄動に呆れるばかりです。日本の近代文学に大きな足跡を残した徳永直の生涯と作品を通して、文学を楽しみ、民族のこゝろを創造刷新するためにどれほど動くことができるのか、我が身の浅学さに忸怩たる思いを抱かざるを得ません。しかし、ここは私に与えられた恩寵だと捉え、中村青史前会長や先輩諸氏に迷惑をかけぬよう、一から勉強したいと思っております。

昨年、未曾有の不況の中で脚光を浴びて大ブームとなった『蟹工船』の小林多喜二と比較して、一九二九年の『戦旗』に並んで掲載された徳永直の『太陽のない町』は、同じプロレタリア文学の双璧だというのに、まだまだ多くの人々に知られていません。現況の社会情勢は新たな格差社会とも言われ、働いても働いても貧困から抜け出せないワーキングプアの人々を大量に生み出しています。働く労働者の視点から、徳永直の作品を再読する必要があります。



総会の様子（2009年5月23日（土）崇城大学市民ホール会議室）

徳永直の会会則

第一条(名称) 本会は、徳永直の会と称する。

第二条(目的) 本会は、徳永直の作家と作品を通して、文学を楽しみ、民族のことは常に創造、刷新することを目的とする。

第三条(事業) 本会は、前条の目的を達成するために左の事業を行う。

- 1、徳永直文学碑を守り、孟宗忌を開催する。
- 2、徳永直の会会報を発行する。
- 3、作品研究会、作品朗読会等を行う。
- 4、その他、必要と思われる事業を行う。

第四条(組織) 本会は、会員、賛助会員及び顧問をもって組織する。

- 1、会員は、本会の目的に賛同し、年間会費を負担する。
- 2、賛助会員は、本会の活動を賛助し、応分の経済的援助を行う。
- 3、顧問は、本会の育成発展に寄与し、会長が推薦したものである。

第五条(役員) 本会に次の役員を置く。

- 1、会長 一名
- 2、事務局長 一名
- 3、広報 一名
- 4、会計 一名
- 5、会計監査 二名
- 6、評議員 若干名
- 7、顧問をおくことができる。

第六条(会議) 本会は、次の会議をもつ。

- 1、総会
- 2、評議員会
- 3、その他、臨時総会

第七条(会計)

- 1、会計年度は、四月から三月とする。
- 2、会員の会費は、当分年間二、〇〇〇円とする。
- 3、会費は、必要に応じて変更することができる。
- 4、会計報告は、会報誌上にて行う。

第八条(事務局) 本会は、左記の事務所を置く。

〒八六〇一〇〇五一 熊本市二本木三丁目一―二八 熊本出版文化会館
 TEL 〇九六一三五四一八二〇一 FAX 〇九六一三五四一八二三四
 振替口座(ゆうちょ銀行) 口座番号 〇一七一〇一九一―二二三七一
 口座名称 徳永直の会(トクナガスナオノカイ)

付則

- 1、この会則は、二〇〇九年四月より施行する。

役員名簿

- | | | |
|------|-------|-----------------|
| 会長 | 高木 陽助 | (元第一高校教師) |
| 事務局長 | 緒方 宏章 | (熊本西高校教師) |
| 広報 | 永田 満徳 | (必由館高校教師) |
| 会計 | 荒木 恵 | (天草高校教師) |
| 会計監査 | 濱名 理香 | (マリスト高校教師) |
| | 林田 百合 | (熊本西高校教師) |
| 評議委員 | 鍛田 吉豊 | (べれそつそ代表) |
| | 廣島 正 | (熊本出版文化会館代表取締役) |
| | 寺澤 孝子 | (徳永直の会会員) |
| 顧問 | 中村 青史 | (前熊本・徳永直の会会長) |

事業計画

- ① 総会・二〇〇九年五月二十三日(土)
- ② 評議委員会 適時
- ③ 孟宗忌 二〇一〇年二月十四日(日)
 - ・ 午前十一時〜(碑前祭)
 - ・ 午後 二時〜 講話と朗読及びミニ展(予定)
 - ・ 午後 五時半〜 懇親会(予定)
- ④ 徳永直文学選集(Ⅱ)の編集・出版(十二月出版予定)
 - ・ 編集委員・中村・高木・緒方・永田・濱名・鍛田・廣島・鶴本 他
 - ・ 編集作業日程・六月六日(土) 午後四時〜
- ⑤ 会報
 - ・ 必由館高校にてふ会館

・ 第五十四号 発行(七月)・第五十五号 発行(一月)

2009年度 予算案 (2009年1月～3月を含む)

収 入		支 出	
前年度繰越 (12月現在)	227,628	1月～3月の支出	
1月～3月の入金		事務所家賃 (1月～3月)	15,000
会費 (2,000円×15人)	30,000	孟宗忌	9,535
寄付	40,101	通信費 (1,2月電話、切手)	14,529
		事務費 (会報送付用フックール)	2,000
		会報53号	18,900
一般年会費 (2,000円×35人)	70,000	通信費 (電話代)	5,000
		" (切手、はがき他代)	24,000
		会報発行	20,000
		事務用品費	50,000
		総会会場費	1,600
		孟宗忌	10,000
		会議費 (編集会議等)	50,000
		定期預金	100,000
		予備費	47,165
合 計	367,729	合 計	367,729

会費納入のお願い

「徳永直の会」の発足にあたり、「熊本・徳永直の会」会員の皆様にも引き続き「徳永直の会」の会員として会員登録をお願いいたします。

ご賛同いただけますならば、2009年度会費の納入をよろしくお願いいたします。

まだ納入のお済みでない方には、会費納入の振替用紙を同封いたしておりますが、この会報がお手元に届く以前にすでに納入されている場合は、行き違いをお許しください。

また、新会員も随時募集しております。お知り合いの方で、ご賛同いただける方がいらっしゃいましたら、ご紹介ください。

〒 860-0051 熊本市二本木3丁目1-28
熊本出版文化会館

TEL 096-354-8201

FAX 096-354-8234

振替口座 (ゆうちょ銀行)

口座番号 01710-9-121371

口座名称 徳永直の会 (トクナガスナオノカイ)

* 上記の住所には、廣島正さんのご厚意で事務所を置かせていただいています。

郵便物等は、以下の住所に送付していただくようお願いいたします。

〒 862-0955 熊本市神水本町6-40
緒方 宏章

編集後記

会も一新し、総会の報告を兼ねた会報をお届けすることとなりました。慣れない会報作りでしたが、会員の皆様のご協力をいただき、無事発行することができました。ありがとうございます。次号は、昭和印刷さんに今までもどおり編集・印刷等をお願いしたいと考えています。(宏)

『太陽のない街』を読む

「徳永直の会」顧問 中村青史

徳永直が日本共産党に入党したのは敗戦後の昭和21年であり、『太陽のない街』の絶版についての自己批判を東京新聞に発表した。戦前は黨員ではなかったが、『冬枯れ』にも描かれるように。母親の一周忌に帰ってきても特高が尋ねてきたり、尾行されたりしているし、『妻よ眠れ』で明かしているように、執筆時にも世田谷の自宅に特高と憲兵が交互に監視にやっけて来ていた。プロレタリア作家ということでは、準小林多喜二扱いを受けていたのである。

昭和25(一九五〇)年、岩波文庫で『太陽のない街』が出版される。とき、彼は自身で解説を書いた。『太陽のない街』執筆の動機や経過を詳しく述べ、自己批判を含めて『太陽のない街』の欠点を並べている。

出版従業員組合の執行委員の一人として、共同印刷の大会議にかかわって首になつたわけで、その時の体験をもとに『太陽のない街』は執筆されたのであつたが、彼はそれを「自然発生的」なものであつたとし、三つの弱点をあげている。第一には、この争議を指導した当時非合法だつた日本共産党の実態を知らなかつたこと。第二には、福本イズムの傾向についての認識が甘く、高枝が大川の孫娘を毒殺したことなどその現れであること。第三には、通俗性に流され、労働者のもつ健康的リアリズムを怪奇なゆがんだものにしてしまったこと。

また昭和5(一九三〇)年、『プロレタリア芸術教程』に「『太陽のない街』は如何にして製作されたのか」を発表して、その中で、一、従来の「創作型」を無視した。二、読者の基準をインテリにおかず、労働者においた。三、「読ませる」ことを第一条件とした云々。と論じたことの反省として、次のように述べている。

「ここにはブルジョア文学への機械的の反ばつと、自然発生的な労働

者気質の無条件是認と、欠陥を逆に「禍されるところが少なくて済んだ」とする似て非なる革命性、じつは思いあがりというべきものがある」と。

岩波文庫本解説の「負」の面を取り上げてみたが、この中にはなるほど肯ける点もあるが、一寸待てよと言いたい点もある。それは『太陽のない街』が発表された当時の評に次のようなものがあるからである。研究では大変重要な同時代評というものである。

「この作品の表現の歯切れのいい平明さと、全体の明るい健康さと極めて自然に出て来る力強さと、材料の配置と筋の展開との新鮮さと、或る程度の感傷と衝撃とそれらは労働者ばかりが喜ぶものではない。」(川端康成『文藝春秋』昭和4年8月1日第7年8号)

「(蟹工船は)悲惨なもの、汚いものに対する幾分かのインテリゲンチヤ的感傷・偏愛が、まだプロレタリア的な健康な明るさを妨げてゐる点がある。その欠点である。これに比較すると、同じ『戦旗』に連載されはじめた徳永直の長編『太陽のない街』は、少なくともこの点だけでは、より健康な明るさをもつてゐる。」(蔵原惟人『東京朝日新聞』昭和4年6月18日)

この当時を代表する作家や評論家が、こぞつて「健康で明るい」と指摘していることである。徳永自身は「労働者気質の無条件是認」が失敗であつたように昭和50年時点で振り返っているが、当時は労働者気質の健康さや明るさがよく表現されていると評されているのである。また、徳永は「ブルジョア文学への機械的の反ばつ」と否定的に捉えたインテリゲンチヤ文学の軽視が、多喜二の『蟹工船』との比較において肯定されているのである。また、従来の創作型を変えたことが、「表現の歯切れのいい平明さ」との評も受けたものではなからうか。

出口の見えない暗い現代世相の反映で、『蟹工船』は共感を呼んでいるのかもしれないが、健康で明るさを持つ『太陽のない街』は、時代閉塞の現状を打破する起爆剤としても読まれねばならないだろう。